

風そよく小川の岸の青柳にゆらく螢のかけの涼しさ  
青柳の糸より細くとふ螢見えつかくれつ影のはのめく  
青柳の糸の敷さへ見るはかりみきは亂れてとふ螢かな

當座探題

岡新録

きのふけふ夏きにければから衣たつたの岡はみどりとなる

軒菖蒲

見るたひに思ひを出つる故里の軒の菖蒲にそよ夕風

夏草滋

里人はかりにかれどもたくま野の草は日ごとにしけりゆくかな

夏眺望

若緑しける野末に白妙の衣にかふる夏は來にけり

雑歌

雲雀

雲井より落くる野への夕ひはり猶大空に聲のゝこれる

藤

千代かけてよはひをちきる松か枝に若紫の藤波の花

斜 草

扶 草

廬 月

芝 峯

清 泉

蘆 月

奇 熊

扶 草

柳

長閑なる春のすかたをいとなかくたるゝ柳の色に見る哉

躑躅

茜さす夕日の影に色そひて園のきりしまてりまざるなり

苗代

苗代の水口祭ひたすらに秋のみのりをいのるばかりそ

感するどころあり

蝙蝠の時を得かほにとふよかな雲井に月の影くらくして

さ月十五日郷友會にさそふ人のありて紅葉山に

物せんといへどさゝいれずしたがひゆくほどに

よめる

心のみ空に通へどまかせぬは風にふかるゝ煙なりけり

曉郭公

ほのくど空わけ方の郭公半は夢になき渡りけむ

尋郭公

いつこにか行きて問はまし郭公卯月半の夕暮の空

さ月十七日亡蟻田君の追吊會に雨ふりければ

よめる

基紀

山人

奇熊

蘆月

なき人を忍ぶ涙かかきくもり雨とふりくる夕やみの空

旅情

錦きてかへるとも見え故郷の夢おとろかす秋の初風

雑報

○演説會

四月廿九日午後六時例の如く演説會を瑞邦館裡に開く、第一席楠田義任君は、冒頭前雜誌部委員とて充分自家の責任を盡すこと能はざりしは余の大に諸君に對して耻るところなりと謙遜せられ、次で『學校の法律』なる題の下にまづ人間に自由の必要ありと同時に制裁の欠ぐべからざることを述べ、法律上の五個の制裁より説き起して學校の制裁に及びてこれが批評を試み、一二の古例を引きてこれを歴史的に説明し、學校の刑罰は入學の際生徒が誓約書によりて學校と契約せるものなれば、一度校規に觸るゝ事あれ

ば、生徒は甘んじてこれが制裁を受けざるべからずと斷じ、猶進んで古は法三條を以て天下を治めしことありしに、今日法律の頗る繁多になれるものは、果して何人の罪なるか、學校に於て校規の漸く多からんとするが如きは、彼の學校騒動なるものこれが一原因をなすことなからんやと述べて奮慨一番し、遂に學校は出來得べく刑罰を省きて道德を以て生徒を治めんことを希望すと結論す、要之氏は法律、制裁、契約、刑罰等の語を藉りて法的に校規を解釋せんとしたるものゝ如き第二席はフアーデル先生にして、  
The necessity of adapting a more rational and practical system of representing thoughts なる題をかゝげて専ら漢字の不便にして思想の傳達に害鮮らざる所以を説き、これが改善策として